

株式会社新日本科学代表取締役社長

永田良一

Ryoichi Nagata

医薬品開発の受託事業からスタートした新日本科学の社長を務める永田氏。現在では受託事業にとどまらず、国内外の研究者や研究機関との協働によって多数の特許を取得し、知財導出による収益率の向上を目指す傍ら、地元鹿児島県に財団を立ち上げ「がん粒子線治療研究センター」を運営している。事業の背景には、「人間にとって本当の幸福とは不安がない状態」そして、「死を見つめながら生を考える」という、密教に基づくさまざまな哲学があった。

「二而不二」の心で生きる

父と対決しつつ新しい道を模索した

——永田さんは新日本科学社長の御子息としてお育ちになりました。いつ頃地元に戻られたのでしょうか。

永田 二四歳で医大を卒業してすぐのことです。臨床の勉強をしていましたので、そちらの道に進もうと思っていました。でも、父が帰ってこいと。当時のわが社は大変忙しく、事業内容も複雑で誰にでも任せられるという状況ではなかったのです。その後、会社に勤めながら二足のわらじを履くかたちで大学院にも通い、専門知識を磨きました。三二歳になって医学博士になったところで、父親が会長に、私が社長に就任しました。——親子で意見の食い違いなどもあったでしょう。

永田 そうですね。私は海外にも出ていきたくはなかったし、基礎研究だけでなく、臨床研究のほうにも事業展開していかなくやと考えていて、父とは意見が異なります。それでも、父の猛反対を押し切って、鹿児島に臨床試験を行うクリニックを開設しました。私の大学の後輩に院長になってもらい、そこでフェイズIという臨床薬理試験の受託を始めたのです。

その六年後、私が三八歳になったとき、古希を迎えた父親にリタイアを勧めたところ、案外あっさり引退して悠々自適の暮らしになりました。それから、一〇〇%私が会社経営をコントロールできるようになったのです。

CEOになって最初に取り組んだのが、和歌山の分析センター開設です。約三〇億円を銀行から借りました。それが新日本科学として、大型の設備投資に対する最初の借入れでした。それだけでは足りない。すぐに臨床試験のフェイズII、IIIまでやる臨床開発事業の拠点を、東京と大阪に設置し、製薬企業が医療機関で実施する治験を支援する事業に参入しました。——その後アメリカにも進出されます。

永田 アメリカは長い間あこが

夢の中で聞こえた「声」に導かれて

——これまでで最も大きなターニングポイントは何？

永田 二〇〇四年の医療・健康都市「メデイポリス指宿」(いぶすき)「がん粒子線治療研究センター」設立

れの地でしたから。アメリカのお客様も進出を切望してくださいました。最初は三〇億円程度の投資をして、和歌山と同じぐらいの規模で始めました。シアトル郊外に野球場が幾つも入る広い土地を買い、そこを造成して、自分で設計して施設を建てたんです。ゆとりをもって立ち上げたはずなのに、事業は拡大する一方で、受注は増えるし人も増やさなくてはならず、四年間毎年投資をしたほどです。五年目に黒字化するまで、約九〇億円の投資をしました。

ロジェクトですね。ちょうどアメリカの子会社が黒字化し、和歌山の分析センターも軌道に乗って、臨床開発事業も安定的に仕事ができるようになってきた。そのときに

大規模年金保養基地「グリーンピア指宿」を買わないかという話が持ち上がったのです。最初は断ったんです。あまりにも巨大過ぎたので。東京デイズニールランドとデイズニールシーを足して、その三倍以上もあるんですよ。国が投資した額も二二〇億円だったそうです。でも、市長さんが何回も東京に訪ねて来られて、「御社は今年上場されたことですし、郷土に錦を飾ってください」と切望されたんです。

「グリーンピア指宿」は過去に公募しても入札が成立せず、このままだと廃虚となり犯罪の巢窟にもなりかねないと言われ、一肌脱ぐしかないなと思って。結局六億円で落札しました。建物の使い道については紆余曲折がありました。鹿児島大学から「医療を中心とするがんセンターをつくって、九州初の粒子線（陽子線）を導入してはどうか」という案が出たんです。そのときに、凄く興味を持つたんですね。小学生のころ「がんを治す医者になりたい」と作文に書いたほどですから。ところが、事業計画を立てると投資に必要な

金額が一五〇億円を超えちゃうわけです。家族や会社の役員は猛反対。上場してようやく個人保証が無くなったところでしたからね。

二〇〇五年の四月二十一日、決断のときが来ました。その日の朝、夢を見たんです。私は、たくさんの人と一緒に光になってつながっていて、その中には先祖も子孫もいっぱいいるのです。私はその一つの光なのです。そしたら、「良一、おまえが死んでも誰かがちゃんと引き継いでくれるから何も心配は要らないよ」という声はつきり聞こえたんです。

私は真言密教に帰依しており、密教の本もたくさん読んでいます。そこで「二而不二」という教えを深く心にとどめていました。仏教では、大日如来の大きな生命体があつて、そこに胎藏界、金剛界という宇宙観があつて、それぞれが別個に独立しているけれども、本当は一つであり、そこにわれわれは生きているという意味です。——二つにして二つならずということですか。

永田 そうです。私は海外出張が多く、年間五〇〇時間以上も飛行



機の中で過ごします。それで、時差がとれずになかなか眠れませんが、あるとき、自分の二人の子供が結婚して子供を二人ずつ生んだら孫が四人になるんだな、その次に、その孫がまた子供を生む、そんなふうには、子孫の数を計算していったんですよ。そうしたら、自分から大体三〇世代、四〇世代で千年がたつたのです。そうすると、

子孫は、実に一兆人にもなるんですよ。自分から見ると千年先の人とはみんな自分の子供たちのようなもの。逆に私の千年前の先祖から見れば、今生きている私たちというのはみんな子供。それなのにお互いに我を張って喧嘩をしている争っている。

結局、「二而不二」というのは、個々はお互いに存在しているけど、本当は一つの大きな命を分か



ながた・りょういち ● 1958年鹿児島市生まれ。医師（聖マリアンナ医科大学）、医学博士（鹿児島大学）、密教学修士（高野山大学）。株式会社新日本科学代表取締役社長、財団法人メディボリス医学研究財団理事長、学校法人最福学園理事長、駐日ブータン王国名誉領事を兼務。米国メリーランド州立大学、北海道大学、高野山大学、聖マリアンナ医科大学、東京医科大学の客員教授を歴任。全国労働基準関係団体連合会「ゆとり創造賞」、日本経済新聞社（国土庁共催）「地域活性化貢献企業賞」、鹿児島商工会議所「産業経済賞大賞」、南日本新聞社「第54回南日本文化賞産業部門」受賞。中華人民共和国広東省高要市「名誉市民称号」を受ける。著書『働くところ—その尊きちから』（同文館出版）。

ち合っていて、限られた時間だけこの世に存在して、それをつないでいくだけ。これが「二而不二」なんだという解釈を自分なりにしました。明け方見た夢は「二而不二」だったんだな、夢の中で私の行く道を教えてくれたんだと思いました。

その当日、医師会館で堂々と私は決意を述べました。反応は予想外に冷やかでしたが（笑）。そこから戦いが始まったんです。私の二千日行が。でも、私はやると決めたら信念をもってやるんですよ、地べたをはってでも。ハードルはいっぱいありましたけれど、そのハードルを一つずつ越えていきました。一番の問題は資金でした。シンクロトロンとガントリーという特殊な加速器や治療器を入れるため、建物や基礎は特殊な工事が必要で大変なお金がかかりました。幸い地元の銀行が中心となってシンジケートローンをつくってくれました。また、補助金も三〇億円でした。ただ、お金を銀行から借りる際、借りるのは公益法人でなければならず、結局理事長である私が個人保証をつけて、何とか落成までこぎつけました。落成式は昨年の四月に行いました。治療は、二〇一一年の一月十一日十一時一分十一秒に第一

番目の患者さんの治療ボタンを私
が押して、そこから始まったんで
す。もうすでに五〇人以上のがん

患者さんの治療が完了していま
す。今ではもう、がんは治る病気
になりましたね。

「苦」があつて「楽」がくる人生の理

——いろいろな苦勞をされたとは
いえ、結局は順風満帆な歩み
に思えます。ただ、そんな永田

——薬の開発には大変な時間と
お金がかかるそうですね。

さんでも、「いや、これはいかな
かな」と思ったことというのは
ありませんか。

永田 一つの薬の開発でも、最低
一〇年以上かかりますし、数百億
円の資金がかかります。そこで当
社では新しい化合物を最初から模
索するのではなく、まずは既存薬

永田 実は今がそうなんです
（笑）。二〇〇五年ぐらいから「メ
ディボリス指宿」が始まったわけ
ですが、普通だったら、その一つ
のプロジェクトをやるだけでも大
事業なのに、一部上場企業のトッ
プとして、世界に展開するグルー
プのリーダーとして、本当に大変
でした。

これが難しい。でも、うまく成功
しました。実際、注射よりも効果
が高く、安全性も高い。そして、
冷蔵が要らないのでコストも安
い。そのほかにも、片頭痛や嘔吐
を抑える薬、鎮痛剤、不妊治療剤、
糖尿病薬などを経鼻投与剤として
開発しています。

それに、私はCEOになったと
きに、サービス業から知財を売る
会社へのパラダイムシフトを目指
しました。製薬会社からの試験受
託のみに甘んじるのではなくて、
自社で研究開発型の創薬をやっ
て、その知財を売る会社にならう
と。

ハーバード大学からは、新薬開
発を行う合弁会社をつくらうと声
をかけていただきました。民間企
業と合弁会社をつくるのは初めて
のこと。今、抗うつ剤の併用薬の



開発をしています。

結局、ここ一四年の間に六〇を超える特許を取りました。

ところが会社が大きくなるうちに、目が行き届かないところも出てきました。それがシアトルの現地法人です。順調に利益が出るようになったところ、すべてを現地のスタッフに任せました。立ち上げのときは毎月行っていたのが、年に数回になって、一回になり、完全に距離を置いてしまったんです。でも、一年前にトラブルが起きて、また毎月シアトルに行く生活が始まりました。任せきりはダメですね。——そうした経験を踏まえて、経営者としてのお考えに何か変

化はございましたか。

永田 私はずっと、企業というのは成長させていくものだと思っていたんです。でも、今は全然違うふうふうに思っています。企業というのは組織を強くすることが大事で、決して従業員を増やすことや売り上げを伸ばすことが目的ではない。また、組織は人でできていますから、一人ひとりの従業員が幸せになるべきだと思うんです。一人ひとりが自己成長していく場を会社が

与えて、それが社会に受け入れられれば利益が出てくる。

今回のアメリカの問題というのは、私にとつては凄くいいチャンスだと思っんですね。確かにこれは大苦です。しかしこの試練を乗り越えれば私は大きく成長できるに違いないのです。「苦楽」は表裏一体で、決して単独では存在しない。今の「苦しみ」を乗り越えることで、私には成長という「楽しみ」がもたらされると思っています。

仏教精神で「幸福」をとらえ直そう

——永田さんは経営者として活躍され、ご苦労もなさいましたし、密教も学ばれています。そんな永田さんから、読者にメッセージをお願いします。

永田 私はブータン王国の名譽領事を拝命しております。ブータンは、国王が「GNH（グロス・ナショナル・ハピネス／国民総幸福量）」という概念を打ち出したことで知られています。日本人は物質的に豊かになったけれども、多分九割が幸せとは思ってないですよ。でもブータン人は九割以上が

幸せだと思っている。

この差がどこにあるのかというと、幸せの考え方がそもそも違つた。われわれは幸せというと、楽しさとか喜びとか、そういう快樂も一緒に相まって幸福。物がなければ幸せじゃない。でも、ブータン人は考え方が違います。

仏教における幸せは、明鏡止水の湖面のように静かに落ちついた状態、不安のない状態のことです。ブータンは、それを「GNH」に置き換えただけです。

日本だって無宗教と言いつつながら

も、生活の中には宗教は必ず入り込んでいる。本人が気付いてないだけなんです。今われわれはそこに気付くことが大切。そこで私は高野山医療フォーラムを支援しています。これは、高野山大学に私が私財を二億円寄附し、寄附講座をつくつたのが基礎。宗教者や医学者、ジャーナリストなどを迎え、金剛峯寺と一緒になって「生と死」を考える機会としています。「生」に気付くには「死」を見詰めたなきや駄目なんです。でも残念ながら、われわれは誰も「死」を経験していません。どういふものかは分からない。でも、二人称、三人称の死というのは身近にあります。その身近な死から何を自分には気付くか、ここが凄く大事なところなんです。幸せは自分の心の中にあつて、自分が変わらない限り自分は幸せになれる、誰か他人の責任にしている限りは成長できないし、自分の幸せを得ることはできない、そういうことに気付いてほしいですね。

——本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。

（聞き手／情報サービス局長・鮎瀬典夫）